

JIU 福祉総合

第6巻 第1号

2010年3月

目 次

巻頭言	(1)
平成20・21年度 福祉文化環境研修レポート	(3)
平成21年度 福祉インターンシップレポート	(27)
平成21年度 福祉総合学部 現場実習レポート	(41)
平成21年度 ゼミ・演習優秀論文	(65)
平成21年度 大学院福祉社会専攻修士論文要旨	(163)
平成21年度 水田奨学生・学習奨励賞受賞者一覧	(189)
平成21年度 水田奨学生・学習奨励賞受賞者課題レポート	(191)
学生支援推進事業 (GP)	(205)
学会発表会優秀賞受賞研究「昭和の道具手作り研究」	(213)

城西国際大学学会
福祉総合学会

発行日 平成22年 3 月17日

JIU福祉総合 第 6 巻第 1 号

発行所 〒283-8555 千葉県東金市求名 1 番地
城西国際大学学会
TEL 0475-55-8800

編集代表 井 上 敏 昭

発行者 城西国際大学 学長

印刷所 新興洋行(株)

〒104-0032 東京都中央区八丁堀2-29-4

TEL 03-3551-5789

利用者主体の新たな段階

福祉総合学部

学部長 井上 由美子

平成21年度は、初めて福祉総合学部の企画が文部科学省「大学教育・学生支援事業（GP）」に採択された、ややオーバーな表現ではありますが“歴史的”な年でした。

企画のテーマは、「介護専門職の就労促進に資する国際基準と教育プログラムの開発」、つまり国際大学として、国際基準をつくり、かつその基準に則した教育プログラムをつくって、国際的に通用する福祉・介護の専門職を養成していく、というものです。

平成21年の7月に採択されてから、授業や「国際介護フォーラム」という形の事業を通して、さまざまなGPプログラムに取り組んできました。『カイゴロー』という介護キャラクターのイラスト・コンテストもその中のプログラムの一つでした。本学学生や千葉県内の高校生に応募をよびかけたところ、たくさんの個性豊かな『カイゴロー』たちが集まってまいりました。

平成22年1月24日、講師に長浜博行厚生労働副大臣と樋口恵子さんをお招きし、「国際介護フォーラム新春ビッグ対談」を開催しました。その幕開けに『カイゴロー』優秀作品などさまざまな賞の授賞式を挙行し、20名の本学学生、高校生が受賞の喜びに浴しました。トリはわれらがボランティア・サークル『スターダストキッズ』の手話コーラスで、市民の方々と学生、まさに会場が一体になったひと時でした。

さて、『カイゴロー』授賞式では、千葉県立東金特別支援学校の生徒さん3名がチャレンジ賞を獲得、ある生徒さんはお母様にケアされながら壇上に上がっていただき、会場は暖かい感動に包まれました。

『新春ビッグ対談』の中では樋口恵子さんが、要介護者の本訪問介護事業所を経営しているという事例をお話してくださいました。これからの時代、介護する側とされる側のくっきりとした線引きをしてはいけないのではないか、一人の人がある時はケアをする側に、ある時はケアをされる側に、ということが自然に行われるのではないかと、といった内容でした。

『カイゴロー』を描いてくれた生徒さんがこれからの社会の生き方を示してくれたように思え、樋口先生のご発言に、私も深く共感したのです。

この学会誌で、多くの学生たち、とりわけ現場実習を経験した学生たちは、利用者主体に言及しています。彼らは、相手の身になって考え、行動することの重要性を語っています。利用者主体は古くて新しい基本理念ですが、超高齢社会に入り、また一つ新たな段階に踏み込んでいかなくてはならないでしょう。利用者主体を実感し実践できた学生たちは、次なるステップに上っていけるのだという確信を抱かせてくれる1冊だと思います。

平成21年度福祉文化環境研修（日本）

担当教員：森洋子・小川智子

1. 研修の目的と概要

本研修は、岩手県宮古市にて、地域社会の中での社会福祉のあり方を学習するため（特に介護保険関連の福祉現場および在宅介護等）、実習等を通じて短期集中的に現場を体験することを目的としている。本学では、現場体験を通じて学生達のキャリア形成を行う目的で、9年前より実施され、平成21年度（第10回目）は8月24日（月）～8月29日（土）、1～4年生の学生13名が参加して行われた。

2. 研修の日程

研修は、学内での事前学習・事後学習を含めて、以下の日程で行われた。

表1 研修の日程

日	時間	内容	研修のポイント
		事前学習（6/17, 24, 7/15, 8/1, 21）	
8/24 （月）	終日	東京駅集合発～盛岡駅～宮古駅到着	宮古へ移動
8/25 （火）	午前	宮古市役所にて事前学習会 ・宮古市長より講話 ・宮古市の地域医療連携について（地域医療保健推進監） ・宮古市の福祉全般概要 （地域福祉課／介護保険課／健康保険課）	宮古市の福祉政策等の事前学習
	午後	・実習施設へ事前訪問 ・消防署見学（災害弱者防災システム等）	実習施設への訪問
		宮古市内の見学（浄土ヶ浜、県立水産科学館）	宮古市内の見学
8/26 （水）	終日	施設介護の研修	施設介護等の研修
8/27 （木）	終日	在宅介護の研修	訪問介護等の研修
8/28 （金）	午前	熊坂内科医院にて地域医療に関する研修	地域医療について講義
	午後	宮古市役所にて研修のまとめ ＊宮古市の福祉に対する感想や質疑応答	研修のまとめ

8/29 (土)	終日	宮古駅前発～盛岡駅～東京駅着 解散	東京へ移動
		事後学習 9月	研修全体の振り返り

3. 研修の内容

2日目の午前中は宮古市役所にて事前学習会を行った。市長より歓迎の挨拶をいただき、学生も自己紹介と共に研修の意気込みを話した。続いて地域医療保健推進監より宮古市の地域医療連携についてお話を伺い、学生も熱心に聞き入り、質問を行った。福祉行政・制度については、福祉課課長、介護保険課課長、健康課課長からそれぞれ宮古市の福祉行政の現状について説明をいただいた。午後は、事前訪問と挨拶を兼ねて、研修先の施設を訪問し、明日からの実習に向けて担当者から指導を受けた。その他、消防署（災害弱者救済システムの見学）、県立水産科学館、浄土ヶ浜等を見学した。夜の学習会では、本日の振り返りを個別学習、グループ学習を通して行い、多くの意見を交換した。

3日目は、7つのデイサービス・デイケア施設で実習を行った。朝は不安そうな顔で出発した学生達もそれぞれ充実した一日を送り、夕刻ホテルに元気よく戻ってきた。夜の学習会では、研修内容についての振り返りを「利用者の方との関わり」、「職員の方との関わり」、「自分自身の変化」の3点に焦点をあて、グループごとにまとめ、発表を行った。異なる体験をした仲間同士で話し合うことでより多くの気づきを得ることができた。

4日目は、6つの訪問介護・訪問看護サービスの施設で実習を行った。この日は実際に利用者の方のご自宅を訪問し、訪問介護・看護・入浴サービスを体験し、充実した研修を行うことができた。夜の学習会では、今日の実習内容の振り返りと、明日の研修全体のまとめに向けて夜半までグループごとに模造紙で発表するための準備を行った

5日目の午前中は、熊坂内科医院にて地域医療に関する講義を伺った。学生たちは、物事を多角的な視点で捉えることの重要性を感じた。午後は、宮古市役所保健福祉部の方々同席のもと、反省会を行い研修で学んだことについてグループ発表をした。グループごとに同じ項目で発表することで、研修の意義を確認できたという言葉を市役所の方からいただくことができた。最後に学生の発案で、感謝の気持ちをカードにし、市役所の方へ渡した。

表2 8月26日（水）施設研修

施 設 名	種 別
老人保健施設桜ヶ丘	デイケア
老人保健施設ほほえみの里	デイケア
JA デイサービスセンター	デイサービス
社会福祉協議会	デイサービス
ニチイケアセンター	デイサービス
サンホームみやこ	デイサービス
NPO ふれあいステーション・あい	デイサービス

表3 8月27日（木）在宅研修

施 設 名	種 別
宮古山口訪問介護ステーション	訪問看護
老人保健施設ほほえみの里	訪問看護，訪問介護
宮古第一病院訪問介護ステーション	訪問看護
かがやきナースケア	訪問看護
サンホームみやこ	訪問看護
社会福祉協議会	訪問介護



浄土ヶ浜にて



最終日グループごとに研修の成果発表

福祉文化環境研修を終えて

福祉総合学科 1 年 渡邊 彩乃

1. 研修で学んだこと

今回の研修地である岩手県宮古市は、人口が約 6 万人で平成17年度に田老市・新里村・宮古市が合併して新・宮古市としてつくられた、先進的福祉を行う市である。

初日は移動で、2日目から本格的に研修が始まった。市役所を訪問し、宮古市の地域医療連携・福祉・介護保険・保健についての講話を各課長さんから聞いた。はじめに、宮古市の病院では以前は約 50 人の医師であふれていたが、現在は医師が減少した為、地域医療連絡協議会を設立したことを聞いた。地域医療連携については、実習前には深く興味を持つことはなかったが、講話を聞いていくうちに少しずつ医療に興味を持つことができた。また、宮古市では健やかで心豊かな人を育むまちづくりのために、「新しいいき健康宮古21プラン」という計画を策定した。壮年期の死亡者の減少と健康寿命の延伸を大きな目標とし、子育て支援事業、生活習慣病予防事業、介護予防事業、心の健康づくり事業など、ライフステージに応じたきめ細やかな施策に、市民・関係機関・団体・行政が一体になって取り組んでいることを知った。介護保険などについて今まで知らなかったことがたくさんあったことに気づいた。市役所での講話は色々と学べたのでとても勉強になった。

次に、消防本部・宮古消防署に訪問し、そこで学んだ事は、1万5000人を超える高齢者の状態（元気高齢者・要介護保険高齢者・入院中高齢者）を正確に把握しているということだ。その家には要介護者がいるかどうか、寝たきりか一人暮らしかを事前に把握してから救急や消防は出動をしていることがわかった。また、宮古市にはドクターヘリがない代わりに消防のヘリが急病人を搬送することを知った。

研修3日目は、デイケア施設で実習を行った。実習中、凄く戸惑って緊張をしたが、レクリエーションのダーツなどを通じて利用者さんの輪に楽しく参加させてもらい、交流を深めることができた。入浴後の利用者さんの髪の毛を乾かしてる時に「気持ちいいですか？」と声をかけたら「ありがとう、気持ちいい」と一言、言われた。私は、その言葉を聞き「福祉の仕事はとてもやりがいがあるな」と実感した。利用者さんと会話をしている時、「将来、宮古に来なさいね」と、ありがたい言葉をかけてもらい、凄くうれしかった。利用者さんからのその一言で、私は今日1日の実習を終わらせたくないと思った。利用者さんともっともっとたくさん話がしたい、そして家族の一員になった気持ちで接したいと思った。職員の皆さんの働きぶりをみて、何に対しても明るく一生懸命に働いており、職員の方々が、互いに協力し合っていることがわかった。その姿を見て、私は協力する事の大切さを学んだ。

4日目の実習では、訪問看護ステーションに行った。そこでは職員に同行させてもらい、利用者さんのお宅を午前・午後と3件伺った。

訪問看護の実習で学んだ事は、家族は利用者が病気になっても見捨てず、そばで看病をしてあげて、

何があっても家族が一番大切だということだ。看護師は、利用者・家族と一緒に協力し、連携をして利用者の病状や1日の健康状態を教え合って動いている事が実習でわかった。看護師さんから学んだ事は、辛い事があっても、利用者さんの前では明るく過ごすという心構えだ。特定疾患を持っている方は、医療保険が無料になる事も教えてもらった。また、訪問看護師さんは常時連絡がとれるような体制になっている為、休みがほとんど無い事を知った。利用者と話を交わすときは、聞きやすいように声を大きくして話すこと、会話一つ一つを大切にしないといけないことを知ることができた。

研修5日目は、医師である宮古市前市長の熊坂先生の病院を訪問し、医療についての話を聞いた。その中で、日本の医師不足と医師の長時間労働の現状を知ることができた。特に、岩手県では医師数が少ないとのことであった。宮古市では医師会による日曜診察を行っており、色々な地域から医師を派遣してもらっていることがわかった。そのような現状には、診療時間が短いという問題があることも学んだ。熊坂先生は、仕事はとてもやりがいがあると言われた。しかし、医師が個人でどんなに頑張っても、医師不足が地域医療を支える上で大きな問題になることを知った。

先生のお話を通して感じた事は、コミュニケーションや関わり方には、様々な種類があるということだ。関わりには言葉を媒介とする「言語的な関わり」と、言葉を使わない「非言語的な関わり」があることを学んだ。関わりの深さにも、「距離のある関係」「距離のほとんど無い関係」「程よい関係」など様々なものがある。利用者さんとの関係をとるなかでは、「同じ高さの目線で接する」「笑顔で挨拶をする」「相手の様子をみて理解をする」ということを知った。言語的ではないコミュニケーションでも、関係を作ることができることを学んだ。初対面の人と会ったときは、最初は距離のある関係から始まるが、今回は実習先での職員の方や宮古市の人々と、初めて会ったとは思えないほど親しい関係・程よい関係になることができたと感じた。

2. 今後に活かしていきたいこと

今回の研修で行った施設実習や訪問看護の実習では、コミュニケーションを第一に学んだ。どの職業に就くにも、コミュニケーション能力はとても重要である。人との繋がりがあるからこそ、会話が成り立つのである。誰に対しても明るく笑顔で接し、相手と心が通じ合う事ができないと会話は続かないと私は思う。

私は研修に行く前、利用者さんや実習先の職員の方とコミュニケーションが取れるか凄く不安だった。だが、研修で行った岩手県宮古市の皆さんは、とても親切で安心してたくさん話すことができ、凄く不安だった気持ちはいつの間にか消えていった。研修で培ったコミュニケーション能力を今後のいろいろな場面で活かして成長をしていきたい。

私は、将来、社会福祉士の資格を取得したいと思っている。社会福祉士の国家試験の合格率は約30%と言われており難関である。資格取得の事で5日目に熊坂先生から言われた言葉がある。その言葉とは、「難しい国家試験でも、きちんと勉強をすれば必ず合格する、中途半端な勉強はダメだ」ということだ。その言葉を胸におき、これから頑張っていこうと思う。

在学中にはもっと一生懸命に勉学に励み、福祉に関する知識などを得て、理解をしていきたいと思

う。自分は人間としてまだまだ未熟だが、将来の夢に向かって一歩ずつ一歩ずつ、前進していけるようにしたい。また、機会があれば是非、在学中にもう一度宮古市で行われる研修に参加したい。

福祉文化環境研修を終えて

福祉総合学科 2 年 城島 光平

1. 参加動機・学ばなかったこと

参加動機は、福祉に関わるボランティアをしたことがあまりなかったことで、これを機会に在宅での介護者の様子やデイサービスなどの施設の様子を見て、就職の時や現場実習の時に役立てたいという考えだった。

学ばなかったことは、①利用者とのコミュニケーションの取り方、②職員が普段から気をつけている事、③施設と行政がどのように連携しているかである。

2. 研修で学んだこと

デイサービスの実習では、初めはなかなかコミュニケーションを取るのに苦戦した。恥ずかしいというわけではないのだが、何を話していいのかわからず、利用者の方に私が話しかけてもいいのだろうかと思えた。だが、遠い岩手県の宮古市まで来た研修ということもあり、自分自身を奮い立たせ一歩踏み出す勇気が時には必要だということを学んだ。

施設での自己紹介に研修に参加した理由を付け加えたが、もっと簡潔な言い方の方が利用者には分かりやすいと職員に言われた。あまり難しいことを言っても利用者に覚えてもらえない。相手に理解してもらうには、伝え方が大事だということを学んだ。

高齢者の方と同じ目線で話そうとして膝をついて話していると、職員から膝をつく行為は狭い所では歩行している方の邪魔になるということを指導された。私が立ち上がろうとした時に周囲の高齢者と接触し、転倒させてしまう可能性がある。大きな事故にも繋がりがねないので中腰で話すことを学んだ。私は初めての施設体験ということもあり、緊張していた。利用者と話さなければという考えばかりになり、周囲に気を配る余裕がなかったのではないかと思う。自分自身の配慮不足が一步間違えたら取り返しのつかない事態を招いてしまうのだということを学んだ。

また、お茶をトレイに乗せて運び手渡す時に、コップの飲み口を手で持っしまい指導を受けた。あまり普段から意識せずにコップを持っていたが、飲み口を持たないように自覚して生活しないと、このようなところで失敗することを学んだ。

訪問看護の実習では見学であったが、3軒の在宅介護の様子を学んだ。1軒目は要介護度1の軽度

認知症の利用者のお宅だった。夫婦での2人暮らしで私達の事を歓迎してもらい、夫婦の心の暖かさを学べたと思う。

2軒目は寝たきりで要介護度5の利用者宅であった。利用者とは言語でのコミュニケーションを取ることはできなかったが、毬でボール投げをした。その時私は利用者と上手にボール投げをするための力の度合が分からなかった。看護師の方は利用者に対してコミュニケーションを常に心がけており、その姿勢を学べたと思う。

3軒目のお宅も寝たきりの利用者の方だったが、訪問前に担当の職員から利用者の記録を見せていただいた。そして介護者の方には介護の様子は尋ねないようと言われた。利用者が難病を持っており、介護者が介護に疲れている理由からだった。そうしたことから想像はしていたが、訪問してみると介護の大変さが伝わってきた。

看護師は仕事をしているなかで、介護者と世間話をしたり、利用者の状態の話をしていた。利用者の体調が良い事などを褒めることにより、帰る頃には介護者の方は訪問した時とは別人のように明るくなっていた。利用者とその家族の心を支えることが社会福祉には必要であり、その配慮やアプローチを学べたと思う。

私が研修した訪問看護ステーションは、それぞれの利用者に対して特定の担当者は決まっていなかった。理由は、看護師が急病などで休んだ場合に、特定の担当者が決まっていると利用者に緊急事態が起こった場合に対処できないからだ。誰でも対処できるように、訪問看護ステーションに勤めている複数の看護師が、一人の利用者を日ごとに交代で担当している。訪問看護ステーションごとに方法が違うとのことだが、連携の重要性について看護師の方に聞くことができたことは良い学びになったと思う。

3. 今後に活かしていきたいこと

今回の研修には1年生から4年生の学生が参加した。大学にいても私は上級生や下級生と話す機会などはなく、人前で発表するのも人と関わるのも苦手であったが、この研修でコミュニケーションやグループディスカッションなどをすることができ、良い経験ができたと思う。

これから行う社会福祉士へ向けての現場実習で、今回の研修の成果を確認したいと思うが、慣れない場所や初対面の人にはどうしても緊張や遠慮をしてしまうので、最後の課題はそれを克服することである。大学に入学してたびたび福祉のアルバイトを探しに福祉教育センターの掲示板を見に行っていたが、一歩が踏み出せずにいた。だがこの経験のお陰で少しずつでも変わって行こうと思えるようになった。

平成20年度福祉文化環境研修（海外）

担当教員：樟本 千里・所 貞之

1. 目的

- ①オーストラリアの医療福祉，障害者福祉，高齢者福祉，児童福祉の各施設を見学することを通して，海外の福祉施設の在り方と日本の福祉施設の違いについて学び，理解を深める。
- ②“福祉”という窓口から，歴史の違い，制度の違い，思想の違いに気づき，自己を客観視することを通じて，これからの自分について考える機会をもつ。
- ③ホームステイを通して，オーストラリア家庭の生活に触れるとともに，能動的かつ積極的な態度及びチャレンジ精神を養う。



2. 研修地

オーストラリア連邦，シドニー近郊

3. 研修期間

平成21年 2月22日～3月3日の10日間

4. 研修の内容

- ①市内見学をおこない，旧市街と新市街を訪れシドニーの文化的な建物について学ぶ。また，NSW 州立美術館や王立植物園を訪れ歴史や文化に触れる。
- ②子どもホスピスでは，対象が子どもだからこそ大事にしている点や，その思想などを学ぶ。
- ③高齢者複合施設では，高齢者が自立した生活を営めるような工夫がなされていることを学ぶ。
- ④チャイルドケアセンターでは，様々な文化的背景をもつ子どもが共同生活をするうえで，大切にしていること，その工夫を学ぶとともに，子どもと触れ合う機会をもつ。
- ⑤ホスピスでは，死生観の違い，信仰の重視などから文化的背景の違いに気づき，ターミナルケアについて考える。
- ⑥脳性麻痺センターでは，親たちが子どもの自立支援システムを作り上げてきた歴史を学び，利用者から直接話を聴く機会をもつ。

- ⑦高齢者を対象とする施設でも、高齢者複合施設と認知症高齢者施設とでは、その役割と理念が異なることを学ぶ。
- ⑧世界遺産であるブルーマウンテンズでブッシュウォーキングを体験し、野生動物公園において、オーストラリア固有の動物と触れあうことを通して、オーストラリアの自然について学ぶ。
- ⑨オーストラリアの社会福祉の講義を通して、連邦、州、地方自治体の3つのセクションが連携して福祉サービスを提供している様子を学ぶ。また移民の国家ならではの取り組みについて学ぶ。
- ⑩ホームステイを通して、オーストラリアの家庭の雰囲気を味わう。

5. 事前事後指導

全7回の事前授業を実施（1/16, 1/23, 1/30, 2/6, 2/12, 2/13, 2/18）。オーストラリアの概要についての学習、福祉用語の復習、ホストファミリーへの質問紙作成、英会話、必要手続きなどを行う。研修後は全3回の事後授業を実施（4/24, 5/8, 5/22）。報告内容のまとめとプレゼンテーションの資料作成などを行う。授業の総合的なまとめとして、オープンキャンパスの場を利用し、口頭発表を行う。

6. 研修の日程

日 付	内 容	泊
2月22日	集合 成田発 JAL771便	機内
2月23日	シドニー着（朝食機内食） オリエンテーション（於 Embassy キャンパス） シドニー市内観光（昼食） ホームステイ先へ移動	ホームステイ
2月24日	①ベアコテージ Manly（子どもホスピス）  ②ロバートソンコミュニティセンター（高齢者複合施設）	ホームステイ
2月25日	③レディグローリ（チャイルドケアセンター） ④セイクレッドハートホスピス（ホスピス）	ホームステイ

2月26日	⑤マクラウドハウス（脳性 麻痺センター） 	ホームステイ
	⑥エディナナーシングホーム（認知症高齢者施設）	
2月27日	講義：オーストラリアにおける社会福祉の概要 英会話 (於 Embassy キャンパス)	ホームステイ
2月28日	ブルーマウンテンズツアー 	ホームステイ
	野生動物公園	
3月1日	ホストファミリーとの交流 ケンブリッジ・クオリティ・ホテルへ移動	ホテル
3月2日	英会話 修了式 	ホテル
	送別会（ランチ） (Embassy キャンパス)	
3月3日	シドニー発 JAL772便 成田着	

平成20年度福祉文化環境研修を終えて

福祉文化学科 3 年（現 4 年） 原 舞子

1. 施設視察の感想

今回は、子どもホスピス・高齢者複合施設・保育施設・ホスピス・障害者自立施設・高齢者施設の 6 つの施設を視察させていただきました。全体を通しての感想はどの施設も「施設」という固いイメージとは違った暖い雰囲気を持っていたということです。

子どもホスピスや保育施設ではかわいいぬいぐるみがたくさんあったり、おもちゃがたくさんあったり、個別の部屋も病室のようなイメージとは逆にまるで普通の家の子ども部屋のようなものでした。

高齢者施設では、利用者の方の徘徊を防ぐために部屋ごとにロックがかけられているという点が日本と同じだなと感じました。これには利用者の方の危険な徘徊を防いだり、安全を確保するといったメリットがあるけれど、自分が外に出たいと思った時にいつも規制がかかってしまうことによって利用者の方にとってもストレスがたまってしまうというデメリットもあるので難しい課題だと思いました。また光によるスヌーズレンがあり、目で見て楽しめたり、手で触って楽しめたりできるのでとても良いシステムだと思いました。スヌーズレンには、病気によってイライラしたり気分の落ち着かない方をライトやミラーボールによる綺麗な光や刺激のあるものに触って楽しんでもらうことで落ち着くことができるという効果があります。これによって人によっては幸せだった子どもの頃を思い出して落ち着いたりします（ノスタルジック）。この光によるスヌーズレンはホスピスでも活用されていて日本にもこのような施設が多くあればいいと思います。

障害者自立施設では、障害を持つ方の障害のみに視点を置くのではなく、その人の人生・人間性を含めた支援をしていました。例えば健常者の人が日常生活でのなんらかの悩みを解決していくように、障害を持つ方も「障害者だから」と見るのではなく健常者と同じように接しながら支援をしていくという考え方に関心を持ちました。確かにそのように考えてみれば、その人の全体の中の 1 つが障害であると見ることができ、人生プランがとても設計しやすくなるのではないかと思います。また、スポーツをしている方がとても多く、大会に出たりするなどそれぞれが目標を持って毎日生活していることを感じることができました。職員の方々もとても優しい雰囲気を持っていて、利用者の方と上手にコミュニケーションがとれていました。

またオーストラリアの制度は日本と違うところが多くて、福祉制度を理解することが難しかったです。

2. オーストラリアの感想

今回の研修で一番大変だったことはホームステイです。自分の知っている英語を忘れてしまう程、緊張と混乱でいっぱいでした。また同じ英語でもオーストラリア人が話すのとアメリカ人が話すのと

では違いがあることを初めて知りました。もう辞書で調べて話すとかそういう次元ではなくて生活していく中で話して話して覚えるしかないんだと思いました。買い物や外食での会話は意外となんとかなるものの、ホームステイ先での会話は一瞬では終わらないので自分のことを伝えるのにとっても苦労しました。

オーストラリアの街並みは想像通りとても綺麗で行く度に圧倒されました。オーストラリアは多文化主義の国なのでいろいろな人種の人が入り少し戸惑いました。視察先の施設でもロシア人・イタリア人など多くの利用者の方がいました。自然も多く特に海があちこちにありました。どの海も日本の海とは比べものにならない程綺麗で海沿いのお店もおしゃれで格安だったのでとても楽しめました。

3. 研修を通して学んだこと

今回の研修を通して学んだことは国によって、文化によって生活様式が違いうように福祉の制度・施設内容も全然違うということです。多文化主義のオーストラリアではなおさらこのことを実感させられました。例えば高齢者施設でもロシア人の利用者の方がいたり、イタリア人の利用者の方がいたりするけれど、「ここはオーストラリアだから」と制限せずそれぞれの文化・生活様式を大事にしながら支援しています。いろんな文化のイベントを取り入れることで利用者の方にも職員の方にも楽しみができるし、利用者の方同士・利用者の方と職員の方とのコミュニケーションの向上にも繋がるのではないかと思います。このように一人ひとり違ってあたりまえということをしっかり認識し、意識しながらこれから先支援できたらなと思いました。

反省点としては福祉に関しての事前学習が少し足りなかった気がします。聞いたことあるけれどもどういう意味か分からない、思い出せないということが多くありました。もう少ししっかりとした事前学習をしていけばすっきり理解できることがたくさんあったと思います。この研修で学んだことを糧にしてこれから先頑張っていきたいと思います。

平成20年度福祉文化環境研修を終えて

福祉総合学科2年（現3年） 瀬尾 実沙江

1. 視察施設の感想

今回の研修で、多くの施設を視察することができた。ホスピスの視察では、初めて子どものホスピスを視察した。行く前は、とても暗いものをイメージをしていたのだが、行ってみると自分の想像していたものとは違い、とても明るい、楽しそうな印象を受けた。また日本では、亡くなった後は比較的すぐに葬儀が行われるが、最後の別れを惜しむため、亡くなった後も3日間はあたかも眠っている

だけかのように、子ども部屋のベッドに寝かすと聞き、とても衝撃を受けた。そのことで、死に対する考え方が日本の方が現実的、シビアなのかもしれないと感じた。また高齢者施設の視察では、日本の施設に実習に行ったということもあり、日本の高齢者施設とオーストラリアの高齢者施設を比較しながら視察をするよう心がけながら取り組んだ。その中で最も日本との違いに驚いた事は高齢者施設のレクリエーションの一貫で、ビールを飲む場があったり、また喫煙の為の灰皿が設けてあることだった。またホスピスでは、痛み止めの為に、モルヒネを投与することができると聞き驚いた。日本では基本的に、痛み止めはもちろんだが、薬は飲み続けたりたくさん投与するのは、体が薬に慣れてしまったり、体に負担が掛るので、あまり良くないとされている。だから、痛み止めなども本当に我慢できないほどの痛みではない限り服用したり、投与はしない。でも痛いだから痛さを我慢する必要は無い。日本は利用者、患者に我慢をさせすぎだ、と職員の方が話してくれたの聞き、痛みを我慢するのが普通だと思っていたので、衝撃的だった。その他にも、障害者自立施設では、利用者が、政府から援助金を貰うため、直接、政府に訴える為、話し合いの場が設けられていると聞き、驚いた。日本ではお金が無いために、十分なサービスの提供が行えなくても、それはしょうがないと諦めている部分であるが、メディアなどを一切通さず、利用者の生の声を政府に届ける場があるのは、とても素晴らしいことだと思った。そしてオーストラリアの施設を視察し感じたことは、利用者のQOLの向上、生活に潤いをもたらすという考え方は、日本の施設もオーストラリアの施設もさほど大差はないということである。また、介護士の人手不足も共通すると思う。しかし、ホスピスでの処置、保育施設の子どもの遊び方などを視察していると、危険ではないか、と思うことがあった。日本の施設では利用者の安全を第一に考えるがために、色々と制限が設けられてしまっているが、オーストラリアの施設では比較的制限があまり無いと感じた。だからと言って利用者を危険にさらしているわけではなく、転んでも怪我をしないように、床に柔らかい素材を使っていたりと様々な工夫がなされていた。そのせいかどの施設の利用者も活き活きしていると感じた。

2. オーストラリアの感想

オーストラリアの街を歩いていて思ったことは、建物が大きく、外装がとても綺麗だということである。そして、トヨタ、日産など日本の車会社を多く見かけた。また寿司屋も多くあり驚いた。オーストラリアでは日本車、寿司など日本のものが人気があるらしく、自分の生まれ育った国のものが他の国の人々に受け入れられていると感じ、とても嬉しく思った。

日本と比べてとても自然が多いと感じた。私が研修で行ったシドニーは、オーストラリアの中心部であり、都会なので大きいビルもたくさんあるが、植物園と間違えるほど自然にあふれた公園があり、大きな木には何十匹の蝙蝠がぶら下がっていてびっくりした。また私がお世話になったホストファミリーの家にも大きな庭があり、そこで野菜や果物を栽培していたりとオーストラリアの人々はとても自然を大切にしていると感じた。だがオーストラリアは雨があまり降らないため、深刻な水不足に悩まされており、節約のため、シャワーは10分で済ませる。洗濯は1週間に1回で、洗濯機は使わず手洗いするなど、様々な節約がなされていた。そして、オーストラリアの人々は、とても陽気で、お店